

恋におぼれるとは、こんな状態を言うのだろうか。

「でも、あの、臨也さん、今日は都合悪いんじゃないですか？」

「悪かったらデートに誘わないよ」

言ってから、にや、と臨也は笑った。人の悪い笑み。

「さっきの女の子たちには誘われたけど断ったから大丈夫」その言葉に、臨也は帝人の行動を正確に把握していたのだと知る。帝人が臨也を発見するより前に彼は帝人の姿を見つけていて、その上で女性たちと話していたらしい。そうして、去っていく帝人を見届けて、メール受信した上でここまでやってきた。たぶん、そういうことだ。

帝人のメール内容が嘘であることを、彼は知っている。嘘をついた理由にも気づいた上で、わざわざここまでやってきた。つまりは、きつと。

（僕が臨也さんが好きだって、きつとバレてる）

臨也は聡いし鋭い。だから帝人の気持ちに気づいても不思議ではなかった。その上で、彼はもう少しごっこ遊びを続けるつもりであるらしい。だから、こうしてやってきて改めてデートをしようと告げるのだ。本当に性格が悪い。けれどそれでも、好きだ。どうしても。どうしようもなく。

恋をするということは、諦めることを知ることなのかもしれない。恋している自分を認めて、それが事実で仕方のないことなのだと、そんな風に。

「気づいてたんですね」

「何のことかな。それより、今日は俺のマンションに来てみる？」

素知らぬふりをして浮かべる微笑は、ひどく魅力的だ。魅入られる自分を自覚しつつ帝人も笑う。たぶん、うまく笑えたと思う。

「良いんですか？」

「駄目なら誘わないよ」

「嬉しいです」

たとえ束の間でも、ごっこ遊びでも構わない。この時間が存在したのは事実だ。

（だから、大丈夫）

ちゃんと覚悟できる。そのときを笑って迎えられる。切実なほどの決意を秘めて、帝人は笑い続ける。今が刹那の時と知っているからこそ。



臨也のマンションはとにかく豪華だった。外観からして立派だし、一人暮らしと聞いているのものすごく広い。贅沢すぎるとすら言えた。

「凄いですね」

「そう？ まあ仕事場も兼ねてるしね」

広い窓まで歩み寄り、眼下に広がる夜景に息を飲む。綺麗と言うよりも、怖いほどだった。見つめていると、そのまま落ちてしまうような錯覚すらあった。